

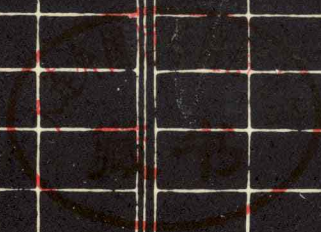
篠田正浩作品集

仮面社

島網天中

正活字印集

飯面社



心中天網島

一九七〇年一月三十日初版発行

著者篠田正浩

装幀粟津潔

発行者服部将太

発行所(株)仮面社 東京都千代田区西神田三一一広瀬ビル

電話東京二六三一〇八六六

印刷福音印刷 製本三高製本

定価九五〇円

© Masahiro Shinoda 1970

心中天網島

目次

I

△シナリオ▽

心中しんちゆうてんのみじま天網島

暗殺

乾いた花

恋の片道切符

II

心中天網島考

——虚実皮膜論の現代的意義——

古典の映画化

——内なる古代的なものの発見——

黒子の発想くろこ

III

わが独立宣言

公怨よさようなら私怨よこんにちは

小津・吉田論争とわが浮沈激しきとき

IV

メイラーが私に話したこと

映画をつくるという戦い

大島渚——篠田正浩

2 2
6 5
0 4

2 2
4 3
5 7 2

2 2 1
0 0 9
5 1 1

1 1
4 0 4 1
8 0 6 0

V

『突然炎のごとく』——原型としての人間の営み——

『8½』——もしくは、ロケットに圧殺された男の物語——

ジョン・ヒューストン氏に

フランス映画22年のあたえたもの

映画・その狂気の系譜

VI

真黒な大きな洋傘

水中翼船

銅器

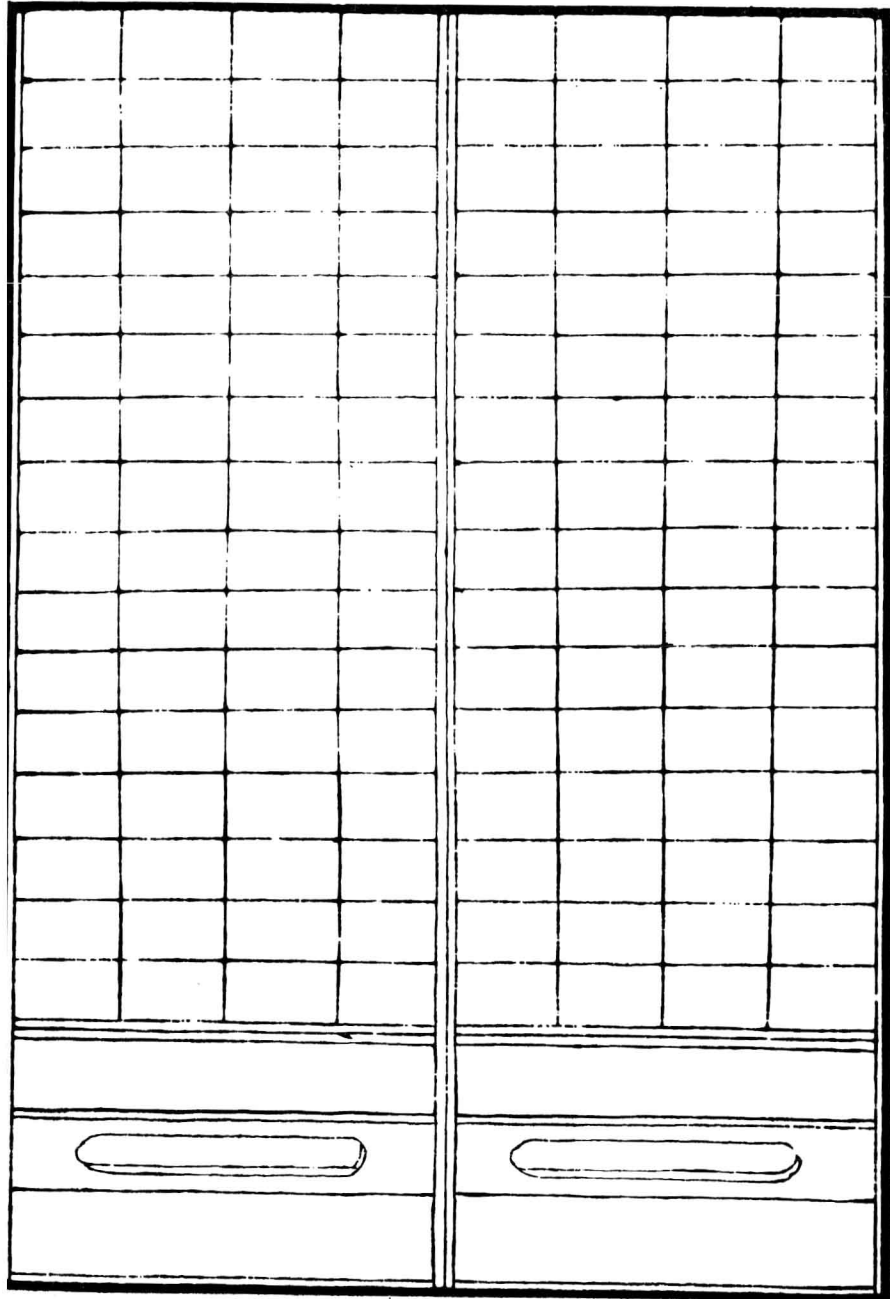
あとがき

作品一覧

3	3	3	3	3	3	2	2	2	2
7	7	7	6	6	0	9	9	8	8
6	4	0	8	2	6	7	1	8	4

卷四

栗津



I

心中天網島

篠田 正浩
武満 徹
富岡多恵子

● プロローグ

人形浄瑠璃の舞台の袖から、大道具、小道具をアトランダムに。

舞台の袖で出を待つ黒子。

床にしゃがんで、小道具を人形の捨てた小道具をすばやくひろう黒子。

黒子の脚、手。人形遣いのゲタ。

楽屋の人形。

楽屋の隅でクの字型にからだを曲げてねそべる黒子。

人形のカシラ。道具をいれる黒い箱。

着物をつけない人形の胴。

楽屋で茶をのむ黒子。ドンブリものをたべる黒子。

楽屋のタタミの上にいる数個の人形のカシラ。

人形のカシラを無造作にあつめる黒子。

● タイトル

人形の足つかいの黒子のはいつくばった所作。

劇場の廊下で赤デンワをかける黒子。

舞台の裏側より、 $\wedge$ 心中天網島 $\vee$ の道行、橋づくしの場面。

白い空間。

二、三〇人の黒子の前向き、後向きの列のネガとポジ。

空白。

人形浄瑠璃 $\wedge$ 心中天網島 $\vee$ の最後、紙治が小春のノドをつく場面。その場面のストップ・モーションへ、

二、三〇人の黒子がかぶさるように居並ぶ。

その黒子が消えた空白。

● 橋の上の死体

白装束をした数人のひとびとが、念仏をとえながらくる。裸の、モノのように重なりあった二つの死体。

白装束のひとびとの列が死体を、モノを避けるがごとくによけて通りすぎていく。

橋の上の死体に、冬の、にぶい光線があたる。

● 治兵衛と黒子の登場

色町の路地。

うすくらやみに、黒子のシルエットがあらわれる。

女郎屋の表の行燈。

治兵衛が家の軒の下をつたうように歩く。治兵衛の

あとをつけるようにあとから黒子が、歩いていく。

女郎屋の名前をいれた行燈が次々にあらわれて消える。

行燈。その「河庄」文字が画面いっぱいににじむようにひろがって、その文字が裏がえしになる

● 治兵衛と小春のメモワール

急に女たちの嬌声がひろがる。

男が女を無理やりにひきずり、女は悲鳴をあげ、悲

鳴が下卑な笑声に変わり、男と女がなだれるように倒れる。

後手に両手をしばられて、頭を振り、髪をつぶれた、逃亡女郎の折檻。

男と女がキモノのままもつれあう様。

そのキモノの乱れ。

男と女の卑猥なさやきの声。

部屋のカスマが閉まり、そこに治兵衛と小春。

治兵衛に小春がしなだれかかり、起請を守袋にいれながら、

小春 治兵衛さん、これで二十と九ツ。

治兵衛 月のはじめに神仏かけてとりかわした、この起請。年が明けたらなんと三十枚。

小春 ええ、年が明けるとは、

治兵衛 もうこの月は師走やないか。

小春 なあ、治兵衛さん、いつになったら。

治兵衛 さいな。それが――。

小春 おまえはあたしに愛想つかす気かえ。

治兵衛 おまえこそ、約束の身請けもできんこの治兵衛に――。

小春 知らん知らん、おまえのために、おまえのために……。治兵衛さん。

小春と治兵衛、コトバのたわむれをやめて抱き合

う。しばらくあつて。

小春 恋しいと思うおまえがおりながら、他のお客の相手をする、この女郎というつとめがせつうて、こうして月のはじめに誓いの文かいても、もしや女郎のたわごとと思われはしないかと……。

治兵衛 なにをいう、小春。いままでいっぺんでもおまえのころを疑うことがあるか。おまえに逢うたきぬぎぬには、もうその次のこと考えて金と暇の工面してくる。恋しいおまえを請出せもせぬこの甲斐性なしに、愛想つきぬか、といまいましい。

小春 あたしとて金で買われたこの身が、いまほどこいまましいことはない……。

このあたしの頭の方から足の先まで、どこもみな金のカタ。

だれがいったい、女を女郎にすることを考えたのかいな。

治兵衛 小春……。

この治兵衛、金が思うままにならぬばかりに。そやけどおまえがなうては生きてはいけぬ。

小春 さあそれは、あたしも同じこと。

どうしたらいいの、治兵衛さん。
いますぐここを逃げるすべもない……。

治兵衛 おまえとこなしで、ずうとこうしていたいものを。

小春 ああ、ほんとに……、でもどうしてそんなにこのあたしを……。

治兵衛 それは、おまえがおなごで、わしが男ゆえやないか。

ああ、おまえがおなごでよかったなあ。

小春 それにしても、女郎が男に惚れたら罪つくりなことに。

治兵衛 このにくいやつ。

小春 治兵衛さん、死にたい、死んでもええか。

治兵衛 おまえこそ。

小春 ああ、治兵衛さん、どうしたらよい。

治兵衛 一つの逢う瀬も、このくるしみ。ああこの小春。ことはでラチあかぬくるしみの、もどかしさをふたりに押しつぶすように、おたがい、相手のからだに自分のからだを投げこむ。

治兵衛の手が小春の衿をひろげ胸へ。小春のフクラハギがきものの裾からすべる。

● 小春、河庄へ

小春、下女の杉をつれて河庄の入口をはいりかける。

おかみ まあまあ、小春さん、お早いおいで。待ちかねていたところです。やつと小春さんが首を縦に振ってくれたっていうからうれしくて。

小春 いやあねえ、おかみさん。お天気だって毎日変わるじゃないの。あたしだってたまには風向きが変わるわよ。

おかみ ほんとにうちじゃ、お客さんが小春小春って大変なのよ。

小春 おかみさん、ねえおねがい、小春小春って大きな声でいわないで。おもてにいろのよ。

おかみ ええ？

小春 いろのよ、いやな奴が。

下女の杉がおどけてへいやな奴の仕草をする。

● 太兵衛の登場

太兵衛、つれの二人と河庄の前にあらわれ、入口の小春を目ざとく見つけてかけよって。

太兵衛 あれあれ小春さん、こらええとこで会うた。このごろはあんまりお顔もおがましてもらえんよってに、恋しゅうて恋しゅうて。

小春 あれまあお口の軽い。

太兵衛 紙屋の治兵衛の身請けは済んだか。ええ？ どうや。

気だてはええし、器量はええし、床上手のこの小春を女房にするのはこの太兵衛か、それともあの紙屋の治兵衛かいなあ。

小春 太兵衛さんなのね。ありもしないうわさをたてて、紙治さんのこといいふらしてるの。

太兵衛 ありもしないとはこりやどうじゃ。

小春 聞えませんよ、あんたのいうことなんか。

太兵衛 (小春にますます接近して) 聞えんのなら、小判の音でもきかしてやろか。

太兵衛、小春を押しこむようにして河庄の内へ入り、あがりかまちへ容赦なしに坐り、小春を眺めるような風情で。

太兵衛 小春さん、おまえも因果な男に惚れたもんやなあ。

この大阪のまちには、男はくさる程おるというのに、よりによってあの治兵衛とはな。二人も子があつて、女房とはいと同志、姑は叔母。それに節季節季には仕払いにも追われる紙屋の商売。それがどや、十貫目近い金こしらえて、女郎の身請けしようとは、こらちいと分にすぎるとは思いませんか。

小春、おかみ、杉と喋りながら、そっぽ向いたままに急にハッキリと。

小春 —— 紙治さんのこと、おまえの知ったことやない。

太兵衛 それにひきかえてこの太兵衛、女房子もなければ、親、兄弟もなし、叔父叔母、いとこはこの親類縁者はカケラもなしの身軽者。義理たてるとはどこもない。クソ生意気たれるのは、あの治兵衛にかなわんとしても、金ではこの太兵衛にちよつとやそつとではかなわんど。おかみ、今晚の客も、治兵衛めじやろう。そや、この小春、金で横どりして、こつちへ貰お。金でできぬことはこの世の中にないわ。さあ上つて酒や。おかみ、酒もつてこい。

太兵衛、ズカズカと奥へはいりかけるのをおかみ、おしとどめて。

おかみ 今晚のお客さまはちよつとちごうて、お侍衆。もうおつつけ見えます。太兵衛さん、今晚はどこぞで、おねがいますよ。

太兵衛 なに、侍だと。侍、侍いうても、町人も侍も客は客。腰に刀をさしたいうて五本も六本もさすでなし。ようして、刀脇差たったの二本やないか。あほくさい。

(おどけて) はんなら。その侍ぐるみで小春を貰お。侍ぐるみで貰うた貰うた。こうして小春に会えたのは、これも宿世の縁かいな。それとも最前、そこで出会ったナマイダ坊主の念仏のご利益か。ありがたいこつちや。こつちもはんなら念仏といこか。

(煙草盆をキセルでたたいて)

ちゃんちゃん。ちゃちゃんちゃん。紙屋紙屋、紙屋の治兵衛、小春狂いが生漉きの紙で、うすい半紙はチリチリ紙であぶない身代スリキレ紙で。ハナもかまれん紙クス治兵衛。ああ、ナマイダ、ナマイダ。やや、うわさをすれば、チリ紙きよったか。

● 侍の登場

辻から河庄の方へ侍くる。河庄の入口の前で立ちどまり、通りすぎ、ゆきつもどりつして、また内の様子进行うかがう。

みずからの装束を氣にかけてか、たびたび刀のツカに手をやり、深編笠を前にひく。
向うの辻を、黒子がすばやく横切る。

● 太兵衛が侍に、からむこと

太兵衛、入口をのぞく侍を見て、内へひきずりいれる。

太兵衛 こらまた、どえらい装束。この晩方に編笠とは。

(小春の声色で浄瑠璃風に) チリ紙さま、なぜにおまえはそのような……。

(侍の編笠をのぞき、治兵衛でないことがわかるが平